学位被授与者氏名	小野　瑠夏（おの　るか）
論文題目	コレスポンダンスによる関係性の生成 –デンマークの障害者生活施設および成人学校における人類学的研究–
論文審査結果の要旨	小野は学部時代に、北九州市小倉南区若園地区において包摂を目指したまちづくりである「ともに暮らす街 – わかぞのインクルーシブ・コミュニティ（WinC）構想」の代表として実践活動をおこない、インクルーシブ・コミュニティに関する知見を深めてきた。 WinC の活動をもとに執筆された卒業論文では、インクルーシブ・コミュニティの成立要件として、属性にとらわれずに個人として理解し合う「個別性」と、互いに個別性を認識した上で対等な立場からコミュニティを形成する「対等性」の、ふたつの人間関係のありかたが重要な役割を果たしていることを指摘している。 本論文はそうしたこれまでの研究をふまえ、さらにそれを発展させるものとして位置づけることができる。小野はデンマークでの留学経験をもとに「個別性」や「対等性」が生成される要因を分析し、支援の現場で見られる「コレスポンダンス（応答）」に注目した。 デンマークは福祉先進国として、社会福祉学の分野では多くの先行研究がある。しかしそのほとんどは制度や政策に焦点を当てたものであり、施設の設備や経済的なサポートなど、外的な社会環境を日本と比較した分析にとどまっている。 本論文では、現地での一年におよぶフィールドワークで得られた事例をもとに当事者の関係性に注目し、デンマークや日本という社会の違いを超えた、より普遍的な視野から議論が立てられている。それだけに、先行研究との視点の違いや研究上の位置づけを、文献レビューの段階でもう少し丁寧に整理しておくべきだったかもしれない。 小林敏昭や桜井啓太は、社会福祉学の分野では、いわゆる健全者手足論に代表されるように、介助が当事者間の「道具的な紐帯」に偏る傾向があることを問題点として指摘している。従来のコミュニケーションやインターラクションという視点では、支援者と被支援者の関係性が固定化され、柔軟性のない支配的で道具的な「自立」にとどまり、関係性の構築という最も重要な課題が欠落してしまう。 小野はそうした課題を乗り越えるために、コミュニティ研究である人類学の手法をもちいて行為者どうしのコレスポンダンスに注目し、事例の分析を進めた。事例からは被介助者と介助者の関係は道具的なものではなく、被介助者自身も積極的に葛藤の解決に関与していることが明らかにされた。それを本論文では「自立」から「自律」へ、と表現している。 そうした意味で本論文は、既存の社会福祉学のアプローチに一石を投じるものである。しかし、社会福祉学の論文として読まれるためには、従来の批判を踏まえたさらに丁寧な論述が求められるだろう。たとえばここで述べられている様々な現場の事例は、介護学の事例研究の文脈でも十分に価値のある記録であるが、そうした事例研究との違いについて、もっと明確に論じてもよかったように思う。これらの点は今後の課題としておきたい。 最後に、望ましい地域共生社会のありかたに関するテーマは、社会福祉学の領域に限らず異文化研究である人類学が古くから取り扱ってきた領域

	でもある。コレスポンダンスといった概念はそうした研究の積み重ねの中から生まれてきたものであるが、現代的な社会課題であるインクルーシブ・コミュニティの形成に、コレスポンダンスがどのように働いているのかという問題については、さらに掘り下げるべきいくつかの議論を積み残している。荒削りではあるものの、注目すべき困難な課題に果敢に挑戦し、多くの示唆を与えてくれる点で、本論文のアプローチは社会福祉学や人類学など学問領域を越えた諸研究分野に高い貢献が期待できるものとして評価したい。 2025 年 2 月 28 日に、北九州市立大学北方キャンパス 4 号館 101 教室において、 審査委員全員出席のもとで最終試験を実施して学力を確認し、論文の説明を受け、質疑応答ののちに、全員一致で当該論文が修士(人間関係学)として十分な内容であると判定した。